

倫理学における依存関係と道徳的個別主義について

蝶名林 亮 (CHONABAYASHI, Ryo)

創価大学 所属

ある行為が持つ規範的性質とその行為に規範性を与える非規範的性質の間にある一種の依存関係 (dependence relation) は、メタ倫理学において常に中心的な研究課題であり続けている。この関係は、たとえば、①「幸福を最大化する行為は、そのような性質によって、正しい行為となる」②「この行為が悪い行為であるのは、この行為が他者を害する意図によってのみなされたからである」などで表現される規範的性質 (正しさ、悪さ、など) と非規範的性質 (幸福の最大化、他者を害する意図、など) の間にある関係である。この依存関係について、その有無を含めて、伝統的にはスーパーヴィーニエンス (supervenience) に訴える形で論争が行われてきたが、近年はこの関係をより明確にしようとする動きが活発になってきている (Chang 2013, Väyrynen 2013, Schroeder 2014)。

両者の関係について様々な問いがあるが、その一つにこの依存関係と倫理・道徳における正当化との関係についての問いがある。上の例②について考えてみると、問題となっている行為の非規範的性質を挙げることで、この行為がなぜ規範的性質を持つのか説明がなされる。それと同時に、この説明によってこの行為を非難することやこの行為と同様の性質を持つ行為を避けることなどの正当化もなされているように見える。規範的性質と非規範的性質の間の依存関係がこのような正当化に使われることを考慮すると、この関係についての正しい理論は道徳・倫理における正当化のメカニズムに一定の見通しを与えるものである必要があることがわかる。

そのような要件を満たす有力な説として道徳的個別主義に関係する理論パッケージを挙げることができる。この理論パッケージには理由の全体論と呼ばれる理由についての形而上学的な説があるが、この説は依存関係のメカニズムについて一つの図式を与える。そして、この図式に合う規範的正当化についての考えとしてしばしば「物語的正当化」と呼ばれる説が提案される (Dancy 1993)。この提案はしばしば不十分なものであるとして批判されるが、筆者が見るところ、このような物語的正当化説は理由の全体論によって示された依存関係と規範的正当化の関係を明確にできる見込みのある説である。この点をさらに擁護するために、本発表では医療倫理・社会福祉の分野で論じられている物語的正当化の例をいくつか参照しつつ、議論を進めていく。このような手順を踏むことで、規範的性質と非規範的性質の依存関係についての考察が、これまであまり強調されてこなかった個別主義的な理論パッケージの強みを確認できることを示していく。

参考文献

- Chang, R. 2013. Grounding practical normativity: going hybrid. *Philosophical Studies* 164, pp. 163-187.
- Dancy, J. 1993. *Moral Reasons*. Oxford: Blackwell.
- Schroeder, M. 2014. *Explaining the Reasons We Share: Explanation and Expression in Ethics, Volume 1*, Oxford: Oxford University Press.
- Väyrynen, P. 2013. Grounding and Normative Explanation. *Proceedings of the Aristotelian Society Supplementary Volume* 87, pp. 155-178.